

社会的市場経済の人間像と秩序像

—アルフレート・ミュラーアルマック説の再検討—

福田 敏 浩

I はじめに

社会的市場経済 (Soziale Marktwirtschaft) は1946年にドイツの新自由主義者アルフレート・ミュラーアルマック (Alfred Müller-Armack) によって提唱されたものであるが¹⁾、それはもともとドイツ経済の再建を意図して考案された社会経済秩序構想であった。言い換えると戦後のドイツ連邦共和国 (以下ドイツと表記する) における政策実践の指針として位置づけられる理想像 (Leitbild) であった。ミュラーアルマックは社会的市場経済のデザイナーであるばかりでなくその実践者でもあった。周知のように社会的市場経済を旗印にしてドイツにおける経済再建及びその後の高度成長政策を指導したのは経済相の任に就いたエアハルト (L. Erhard) であったが、ミュラーアルマックはそのエアハルトの補佐官として社会的市場経済秩序の建設に尽力した。「エアハルトの社会的市場経済の戦友」²⁾と称されるゆえんである。

筆者は過去に二度ほどミュラーアルマックの社会的市場経済の秩序像及び政策体系について考察し、それらの特徴を明らかにしたことがある³⁾。それから10年の歳月が流れたが、その間ミュラーアルマック説を十分に捉え切れていないのではないかという思いを捨て去ることができず、再考の機会を窺っていたが、この度よ

うやくその責めを果たす手掛かりを得ることができた。ドイツの経済学者アンドレア・ホツツェ (Andrea Hotze) の手になる書物に巡り合えたのである。

ホツツェは2008年に “*Menschenbild und Ordnung der Sozialen Marktwirtschaft: A. Rüstow, W. Röpke, A. Müller-Armack und ihre Konzeption einer Wirtschafts- und Gesellschaftsordnung nach dem Maße des Menschen*” を出版した。本書は社会的市場経済の基礎に置かれたリュストウ (W. Rüstow)、レプケ (W. Röpke) 及びミュラーアルマックの人間論を比較考察し、それを踏まえて社会的市場経済の人間像及び秩序像をいわば立体的に明らかにしようとしたものである。筆者の知る限り人間論の角度から社会的市場経済を研究しようとする試みはこれまでほとんどなかったように思われる。それだけに本書は文字通りユニークであると言える。経済学の「アメリカ化」⁴⁾や「プラグマティズムへの転向」⁵⁾が叫ばれて久しいドイツ経済学界にあっていかにもドイツらしい重厚な社会経済学の再登場であり、喜ばしい限りである。

以下、ミュラーアルマック説に限定して社会的市場経済の人間像と秩序像を描き出してみよう。そのさい人間像についてはホツツェ説に拠りながら考察を進めることにしたい。

II 第三の道

別稿で述べたように、ドイツ新自由主義はナチズム政権の誕生前夜にあたる1932年

1) ミュラーアルマックは1946年に自分の秩序構想を社会的市場経済と命名したと述べている。Müller-Armack (1998) p.257

2) Schlecht (1997) S.100

3) 福田 (1999a), 福田 (1999b)

4) Herder-Dorneich (1989) S.3

5) Tuchtfeldt (1969) S.40

に登場した⁶⁾。この年にリュストウはドイツ社会政策学会のドレスデン大会において新自由主義の立場を宣言し、同じ年にオイケン(W.Eucken)はリュストウとほぼ同様の考えを述べた論文“*Staatliche Strukturwandlungen und die Krisis des Kapitalismus*”(in *Weltwirtschaftliches Archiv*, Bd.36, S.297-321)を公にした。また、学界の外では1931年の半ばごろからリュストウがリベラルなスタンスをとる学者や政治家や企業家等に呼びかけて「ドイツ自由経済政策同盟」を結成し、反レッセ・フェール・反集産主義の立場に立つ新しいリベラルな経済政策を唱道した⁷⁾。この結社にはドイツ新自由主義の第一世代にあたるレプケやオイケンらが参加した。

ドイツ新自由主義の立場はアングロアメリカン・ネオリベラリズムとは基本的に異なる。ひとと言え、国家と経済との関係、つまり経済に対する国民国家の干渉制度に関する考え方が根本的に違うのである。前者は誘導、後者は自由放任の立場に立つ。シカゴ学派に代表されるネオリベラリズムのネオとは名ばかりでその内実は19世紀リベラリズムであり、オールド・リベラリズムなのである。「過去に捨てられた思想を変えなしに単に復活させようとするものにこの言葉[Neoliberalismus]が使われている。しかし、変りもしない思想に新しい名称は必要ない。その限りで“neo”という接頭辞は余計であり、人を惑わすものである⁸⁾」というヴィルゲロット(H.Willgerodt)の指摘は正鵠を射ている。

こうしてドイツ新自由主義は自由放任主義と違って国家による経済への干渉を容認するが、干渉方式の点では全面干渉の集産主義と違って一種の誘導である市場整合的な干渉、つまり「市場法則と両立しうる国家制御」⁹⁾を主張する。

6) 福田(2001) pp.25-26 Hegner(2000) S.23

7) Hegner(2000) S.22, Gäfin von Klinckowstroem(2000) S.76

8) Willgerodt(2006) S.54, [] 内は筆者による補記である。

9) Müller-Armack(1966) S.111

このような意味でドイツ新自由主義は第三の道(dritter Weg)の方向をとる。

ドイツ新自由主義には三つのグループがある。社会学的新自由主義派、フライブルク学派及びケルン学派である。これらのグループの第一世代は第二次世界大戦後のドイツにおける経済再建のために政策的処方箋とも言える社会経済秩序構想を設計した。社会学的新自由主義派のレプケは「経済ヒューマニズム」(Wirtschaftshumanismus)を、フライブルク学派のオイケンは「競争秩序」(Wettbewerbsordnung)を、ケルン学派のミュラーアルマックは「社会的市場経済」を設計した。いずれもレッセ・フェール資本主義と集産主義とともに退け、第三の道をめざすものであった。

Ⅲ 社会的市場経済の人間像

ミュラーアルマックは典型的な西欧知識人であった。彼は経済学者ではあるが、いわゆるエコノミストの枠に収まり切れない視野の広さと奥行きを身につけた碩学であり、その77年の生涯(1901—1978年)を通して経済学的研究、社会学的研究及び歴史的研究に亘る膨大な数の著作を遺した¹⁰⁾。彼はまたこれらの研究を通して独特の人間論を展開したが、それは彼が残した研究全体にいわば通奏低音のように鳴り響いているのである。

以下ホツツェの研究に拠りながらミュラーアルマックの人間論を見ていくことにしよう。

1. 哲学的人間学

ミュラーアルマックの人間論は思想系譜的には1920年代末のドイツに登場した哲学的人間学(philosophische Anthropologie)の線上に位置づけられる¹¹⁾。哲学的人間学を代表するのはシェラー(M.Scheler)、プレスナー(H.Plessner)及びゲーレン(A.Gehlen)であるが、彼らは社会学、

10) 詳しくは福田(1999a) pp.4-6を参照されたい。

歴史学及び生物学の科学的認識に依拠しつつ生物的存在にして精神的存在という統一かつ包括的な人間像を描き出した。このようにして彼らは19世紀以来の自然主義の人間観(物質的・生物的存在)と理想主義の人間観(精神的存在)という二つの対立的な一元的人間観の統合を図ったのである¹²⁾。

2. 自然と精神の弁証法的統一

ミュラーアルマックはとりわけプレスナーの考えに拠りながら自然主義の人間観と理想主義の人間観の統合を試み、人間を自然と精神の弁証法的統一(dialektische Einheit von Natur und Geist)と捉えた¹³⁾。人間は生物として自然界の一部であるから自然的存在となる。他方で人間は自然環境の中で客観の対象を認識しうることによって自立的な自我中心(Ich-Zentrum)を獲得し、こうして精神的存在となる。人間は純粋に自然的存在ではなく、また純粋に精神的存在でもなく、二つの存在領域は互いに浸透し、互いに対立する自然と精神は弁証法的に統一されている。人間は天使でもなく、獣でもないユニークな存在である¹⁴⁾。

3. 人間の存在特性

ミュラーアルマックによればこのような人間存在には間接性、開放性、歴史性、非固定性、価値拘束性、超越拘束性ならびに社会的次元という特性が備わっている¹⁵⁾。

①間接性(Indirektheit)

間接性は人間の生物的存在に備わる特性であ

る。ミュラーアルマックはゲーレンに倣って人間を「欠陥生物」(Mängelwesen)と捉える。人間は生を受け肉体的に完成するまでに他の動物と比べて長い時間を必要とする存在であり、その意味で自足性の欠落した存在である。人間は生物学的には他の動物に比べて弱い存在である。しかし人間は精神を有しているので自足性の欠落を補うために道具を作り、使用することのできる“homo faber”である。こうして人間は道具の製作と使用によって、つまり迂回という間接的な方法によって諸目的を達成し、このことを通して自然界においてその生物的存在を盤石なものとする¹⁶⁾。

②開放性(Offenheit)

人間は他の動物のように自然環境に閉じ込められ、それに従うだけの閉鎖的存在ではなく、精神を有するがゆえに自然環境を改変しうる自由を持つ開放的存在であり、ゲーレンの言う“Weltoffenheit”(世界に開かれた存在特性)を有する。このような意味で人間は本性からして自由の存在である。ただし、その自由は絶対的なものではなく、拘束された自由である。人間はその自然的存在のゆえに自然環境に拘束され、それを完全に乗り越えることができないからである。人間はまた歴史、価値及びゲマインシャフトにも拘束される。こうして人間は同時に自由かつ拘束的であり、したがって自由と拘束の弁証法的統一である¹⁷⁾。

③歴史性(Geschichtlichkeit)

人間は生まれた時代に拘束されるが、同時にその時代を限られた範囲で改変しうる自由を有する。したがって人間生活は歴史的与件とその限られた改変との弁証法的統合によって特徴づけられる。こうして人間存在は本質的に歴史性を有する¹⁸⁾。

11) Hotze (2008) S.197,247. なお、ミュラーアルマックは「1920年代にトレルチ、デイルタイ、エックスキュル、マックス・シェラー及びプレスナーによって展開された哲学の人間学の発展とともに研究生を送ることに恵まれた」と述べている。Müller-Armack (1973) S.17

12) Hotze (2008) S.36

13) Hotze (2008) S.193,195

14) Hotze (2008) S.196

15) Hotze (2008) S.197-214

16) Hotze (2008) S.198

17) Hotze (2008) S.202

18) Hotze (2008) S.205

④非固定性(Unfixiertheit)と価値拘束性(Wertgebundenheit)

ミュラーアルマックによれば人間は同時に自然的存在かつ精神的存在であるが、このことは人間の存在中心が両極のいずれか一方に固定されておらず、両極の間のどこかにあることを意味する。この意味で人間は中間的被造物(Mittel-geschöpf)である¹⁹⁾。また人間は歴史の中でその生活を価値に導かれつつ営む。この意味で人間は価値によって拘束される存在である。その価値は宗教や文化によって生み出される²⁰⁾。

⑤超越拘束性(Transzendenzgebundenheit)

超越に関するミュラーアルマックの考えはキリスト教の人間論の線上にある。キリスト教は人間を生物的、精神的及び超越的な存在と捉えてきた。人間は神によって不滅の魂を与えられていることから直接神に向かい合う。人間はその本源を神に持ち、神に結び付けられた存在である。したがって超越拘束性という特性が人間に与えられている。ミュラーアルマックはこのようなキリスト教の人間観を受容しつつ、人間が自らその存在中心を定めるためには超越性の具体的現れである神的なもの、宗教または代用宗教(Ersatzreligion)を必要とするという考えを述べている²¹⁾。

⑥社会的次元(soziale Dimension)

ミュラーアルマックによれば人間は非固定性という存在特性からしてゲマインシャフトを必要とする。人間は存在の非固定性のゆえに単独ではその生活の在り方を決めることができない。ゲマインシャフトの中で他者と結びつくことによってしか自身の生活に対して存在に合った方向性を与えることができない。したがって人間は生まれながらにゲマインシャフトへの帰属を強いられた存在であり、この意味で社会的次元

を内蔵しているという²²⁾。

以上がミュラーアルマックの人間論の骨子であるが、それには哲学的人間学、キリスト教の人間論に加えて人間存在の社会性についてはアリストテレス、リュストウ及びレプケの考えが色濃く反映されている。このようにミュラーアルマックは先行の諸学説の統合(諸学説の弁証法的統一?)に長けており、「統合の達人」と言っても過言でないような印象を受ける。

IV 社会的市場経済の秩序像

1. 様式としての社会的市場経済

ミュラーアルマックの社会的市場経済研究は経済様式論のスタイルを取っている。彼は第二次世界大戦前のドイツでは経済様式(Wirtschaftsstil)の研究者として知られていた。代表的著作に“Genealogie der Wirtschaftsstille”(Stuttgart,1941)があるが、その中で彼は経済、社会、国家及び宗教的世界観を互いに関係づけて資本主義の歴史的個性を明らかにしようとした。経済様式論は今では本家のドイツにおいても廃れてしまったが、それはもともと1930年代のドイツにおいて経済史家ベヒテル(H.Bechtel)に発し、シュピートホフ(A.Spiethoff)やミュラーアルマックらによって展開されたものである²³⁾。その特徴は、経済はもとよりその他の生活諸領域をも考察することによって各時代の経済様式(たとえば資本主義)の歴史的個性をいわばトータルに把握しようとするところにある²⁴⁾。たとえばシュピートホフは各時代に支配する経済様式の個性把握に資する考察項目として経済

22) Hotze (2008) S.213

23) Hegmann (2004) S.99

24) ミュラーアルマックは宗教社会学の立場から社会・経済・国家の変化及び発展は宗教的世界観の関数であるという決定論の考えをもって資本主義とプロテスタント主義の関係を解明しようとした。福田(1999a) p.5を参照されたい。

19) Hotze (2008) S.203-204

20) Hotze (2008) S.208,331,333-334

21) 代用宗教とはキリスト教に代わるコミュニズムやナチズム等の世俗のイデオロギーのことである。

精神, 経済体制, 経済経過, 社会体制及び自然的・技術的基盤を設定した²⁵⁾。

ミュラーアルマックによれば「社会的市場経済は純粹の競争理論ではない。一口で言えばそれは様式概念と名づけられる。社会的市場経済では市場, 国家及び社会的諸集団の間の様式的調整がめざされる」²⁶⁾。この引用文から社会的市場経済は市場, 国家及び社会から構成される様式(Stil)であることが分かる。彼の場合, 市場, 国家及び社会がオイケンの言う諸秩序相互依存という角度からいわば一体的に考察されている。

2. 理想像としての社会的市場経済

経済様式としての社会的市場経済は設計された秩序である。つまりミュラーアルマックがヨーロッパ近代という時代を支えてきた思想及び社会的・経済的現実の批判的検討の中から教訓や改良すべき点を読み取って描き出した未来志向の理想像であった。彼は次のように述べている。「社会的市場経済とは何か。それはこれまでの歴史現実の中で実現されたことのない市場経済の可能性である」²⁷⁾。この意味で社会的市場経済は当為としての性格を持つべき秩序なのであるが, しかしそれは空想ではなく, 実現可能な理想像であり, 経済政策及び社会政策の実践にさいしての究極の目的なのである。

3. 「人間を尺度にした秩序」としての社会的市場経済

ミュラーアルマックが社会的市場経済の設計にさいして基礎に置いたのは上に述べた人間像

であった。彼によれば社会的市場経済は「人間を尺度にした秩序」²⁸⁾ (Ordnung nach dem Maße des Menschen) である。すなわち社会的市場経済は人間の存在特性に照応した秩序, つまり「人間的秩序」なのである²⁹⁾。以下, ホツツェ説を援用しながら人間的秩序の特性を明らかにしてみよう。

① 弁証法的秩序

上に見たようにミュラーアルマックによれば人間は自然的存在と精神的存在の弁証法的統一体である。すなわち各人はその内面において対立する自然と精神を, したがってまた両者から出てくる多種多様な対立的諸欲求を弁証法的に均衡化し, もって自己の安定を図るように宿命づけられた存在である。社会的市場経済はまずもってそのような人間存在に照応する弁証法的秩序である。ホツツェの解釈によれば人間存在から出てくる諸対立はさまざまな競合的もしくは対立的な諸目的の形をとるが, それらを弁証法的運動のジテンゼにおいて同時に実現しようとするのが弁証法的秩序なのであり, 社会的市場経済なのである³⁰⁾。

ホツツェによればこのような弁証法的秩序としての社会的市場経済には先に述べた開放性, 間接性, ダイナミック性及び全体性の属性が与えられている。順に見ておこう。

② 開放的秩序

人間は精神を有するがゆえに自然環境を限られた範囲で改変しうる自由を持つ開放的存在である。ミュラーアルマックによればこのような開放性に照応する社会的市場経済は人間の自由かつ自発的な目的設定に対してオープンでなければならない³¹⁾。つまり多種多様な対立的諸目標を同時に実現しうる秩序でなければならない。加えてそれはまた未来に対しても開かれた

25) Spiethoff (1932) S.76ff

26) Müller-Armack (1966) S.297. 別の個所では「社会的市場経済は非常にさまざまな固定的諸要素及び可変的諸要素が一つの全体へと組み合わせられる様式である」と述べられている。Müller-Armack (1973) S.19

27) Müller-Armack (1966) S.234

28) Müller-Armack (1973) S.19

29) Müller-Armack (1966) S.277

30) Hotze (2008) S.254-255

31) Hotze (2008) S.256

秩序でなければならない。つまり時間とともに変化する、また新しく登場してくる諸目的や諸欲求に対応して絶えず修正する必要がある「未完の処方箋」と考えられている³²⁾。したがって社会的市場経済は「一回限りの実験ではない」³³⁾。一度限りの政策実践で完成するものではなく、将来にわたって絶えず改良を重ねていくべき秩序なのである。

③間接的秩序

人間は迂回的な間接的諸手段によって諸目的を実現しようという意味での間接性は人間存在に固有の属性であるが、社会的市場経済はまたこれに照応するものでなければならない。ミュラーアルマックは間接性の要件を備えた手段として市場経済が最適であると考えている。対立する諸目的や諸欲求を同時に実現しよう手段は市場経済の外にないと言うのである³⁴⁾。したがって彼の社会的市場経済の構想の中では市場経済という資源配分制度は自己目的ではなく、文字通り手段として位置づけられている。

ただし、彼の考えでは市場経済は万能の「全自動機械」³⁵⁾ではなく、「半自動機械」³⁶⁾である。ヨーロッパの近代史が教えているようにそれだけでは社会的公正を実現しえないし、社会的アンバランスの多くを解決できないからだと言う。これらの問題の解決は結局のところ国家に委ねざるをえない。つまり、国家の経済政策や社会政策(Gesellschaftspolitik)による解決である。

④ダイナミックな秩序

先に見たように人間存在は歴史性を有するが、社会的市場経済はこの存在特性に照応するダイナミックな秩序でなければならない。その時々、の歴史的現実にと束縛されつつもその中でたえず付加価値を創造していく秩序である。この意味で社会的市場経済はダイナミックな進化的秩序

であり、したがってたえず検証と改革が必要とされる未来に開かれた秩序なのである。

⑤全体的秩序

既に述べたように社会的市場経済は経済様式である。つまり、経済はもとより国家及び社会という全生活分野を包摂し、それらを調整し結合する様式であり、この意味で全体的秩序である。

4. 社会的融和

ミュラーアルマックが描き出した社会的市場経済の秩序像の背景には彼の哲学的人間論の外に彼の言う社会的融和³⁷⁾(soziale Irenik)の考えがあることを補足しておこう。“Irenik”とはもともとキリスト教諸宗派間の融和と平和をさすが、“soziale Irenik”にもこれとほぼ同様の意味が込められていた。つまり、ドイツ及びその他のヨーロッパ諸国において互いに反目し対立してきた主要な思想相互間の融和を図り、平和な世界を築きたいという願いである。彼によれば長らく支配してきた主要な思想はカトリシズム、プロテスタンティズム、進化的社会主義及び自由主義であった³⁸⁾。これらの四大思想に共通する信条なり価値なりを見出し、それらをベースにして平和なヨーロッパを構築するというのが敬虔なプロテスタントであったミュラーアルマックのめざしたところであり、社会的市場経済はまたこの目的の実現に資するものとして描かれたのである。

37) ミュラーアルマックは1950年に“*Soziale Irenik*”と銘打った論文を書き、その中で当時のヨーロッパを代表する四大思想—カトリシズム、プロテスタンティズム、進化的社会主義及び自由主義—は敵対的態度を捨てて互いに歩み寄るようになり、ヨーロッパは今や和解の時代(Zeitalter der Versöhnung)を迎えたという趣旨のことを述べた。四大思想とも時代診断や社会的課題や経済政策等に関する議論において互いに似通った考えを主張するようになり、思想対立よりも思想融和の方が前面に出る時代になりつつあると見たのである。Müller-Armack (1950) S.181-203, 福田 (2002) pp.15-16を参照されたい。

38) Müller-Armack (1950) S.183

32) Hotze (2008) S.268

33) Müller-Armack (1966) S.261

34) Hotze (2008) S.270

35) Müller-Armack (1966) S.115

36) Müller-Armack (1966) S.235

以上のような考えがあったればこそミュラーアルマックは社会的市場経済の哲学的背景は市場メカニズム信仰にすぎないという批判に対して社会的市場経済は「宗教的ルーツ」³⁹⁾をもち、「神学的・哲学的信念に発するシステム」⁴⁰⁾であることを強調したのである。

V 価値と秩序

1. 二つの価値

ミュラーアルマックの論述を解釈すると、社会的市場経済は「人々が自由に、かつ社会的に安全に生活できる」⁴¹⁾ような人間的秩序を実現することを究極の秩序目的としている。人間的秩序では自由と安全という二つの価値が人々の生活の中で十分に実現されるということなのであるが、ではなぜミュラーアルマックはこれらの価値を重視したのか。筆者の解釈では次の三つがその根拠と考えられる。

第一はホツツェが指摘するように⁴²⁾、自由と安全は人間の存在特性にかかわる。人間は開放的存在である。つまり、人間は精神的存在であるがゆえに環境に制約されつつもこれを改変しうる自由を有する。しかるに人間は本源的に自由を欲求する。他方人間は本性からして安全を欲求するが、それは自我中心が一点に固定されていないという人間存在に特有の不安定性から出てくる。

第二の根拠は先に述べた社会的融和にかかわる。つまり自由と安全は四大思想に共通する基本的価値であるというミュラーアルマックの認識に由来する。

第三は大衆社会の欲求にかかわる。生活の不確実性が次第に増しつつある時代状況の中で人々はとりわけ生活の安全や社会的安全をまず

まず欲求しつつあるというミュラーアルマックの現実認識である。

ミュラーアルマックは社会的市場経済を「社会的安全と経済的自由の結合」⁴³⁾とか「自由主義秩序と社会的安全の真の結合」⁴⁴⁾と捉えているが、これらは自由と安全という価値—両者は取りも直さず社会的市場経済の基本目的である—の面から見た定義である。

2. 経済秩序と社会秩序

社会的市場経済は経済秩序と社会秩序という二つの部分秩序から構成される社会経済秩序⁴⁵⁾(gesellschaftliche und wirtschaftliche Ordnung)である。

①経済秩序

ミュラーアルマックが最適と考える経済秩序は競争秩序である。このコンセプトはフライブルク学派のオイケンに由来する。オイケンによれば競争秩序の中核を成す資源配分制度は競争的市場経済である。そこでは市場アクターが多数であり、各アクターはプライステーカーであり、生産者は消費者への貢献(マルク獲得)の形での競争つまり業績競争(Leistungswettbewerb)を強いられる。オイケンにあってはこのような競争秩序において個人の自由と資源配分の効率が最大限に実現されると考えられていた。ミュラーアルマックも、明言はしていないが、このような競争秩序をそのまま受容していると見てよいだろう。

ただし、ミュラーアルマックにはオイケンに匹敵するようなマクロ形態論⁴⁶⁾(Makromorphologie)がない。オイケンも競争秩序を採るに先だって経済秩序に関する体系的かつ精緻な形態論を展開していた⁴⁷⁾。中央指導

39) Müller-Armack (1998) p.258

40) Müller-Armack (1998) p.259

41) Müller-Armack (1966) S.238

42) Hotze (2008) S.200-223

43) Müller-Armack (1966) S.236

44) Müller-Armack (1966) S.233

45) Müller-Armack (1966) S.295, Müller-Armack (1998) p.256

46) Bress (1996) S.269

47) 詳しくは福田(1986)第4章(pp.92-116)を参照されたい。

経済と市場経済という二つの資源配分制度の分類、総数で100にも及ぶ市場形態の分類及び三つの貨幣制度の分類である。これらのうちから自由と効率という二つの価値を基準にして資源配分制度については市場経済が、市場形態については完全競争が、貨幣制度については安定的マネーサプライ制度(貨幣価値の安定のために景況に応じて貨幣供給量を調節する制度)が選択され、競争秩序が設計されたのである。筆者が目を通した限りではミュラーアルマックの著作にはこれに匹敵するものが見当たらない。もっと言えばそもそも秩序に関する経済学的分析—ホップマン(E.Hoppmann)の言う秩序経済学(Ordnungsökonomik)⁴⁸⁾—がないのである。

②社会秩序

経済秩序以上に掴みどころがないのが社会秩序である。社会秩序に関する定義や仕組みなどに関する基本的事項について何も説明がないからである。社会秩序には経済以外の生活諸領域のすべてが含まれていると言うのであるが、これでは説明にならない。社会を狭くとって見てもせいぜい国家を含む社会的諸集団の集合体といったほどの内容しか持たないように思われる。

VI 経済政策と社会政策

社会的市場経済の中核に位置するのは競争的市場経済である。ミュラーアルマックにあっては自由と安全という二つの目的の実現に資する最適の制度は競争的市場経済以外にないと考えられている。しかしながら、彼によれば19世紀のレッセ・フェール体制が証明しているように市場経済は野放しにすると物心両面でのプロレタリア化をもたらす⁴⁹⁾、自由と安全を脅かすようになる。したがって市場経済の暴走に歯止

めをかけるためには国家による干渉つまり経済政策が必要不可欠となる。他方市場経済は、たとえ国家によってコントロールされる競争的市場経済であっても、単独では競争の結果として発生する社会問題を解決することができない。その解決のためには国家による社会政策が必要となると考えられている。

1. 経済政策

①政策主体

経済政策及び社会政策の主体は言うまでもなく国家であるが、ミュラーアルマックにあっては国家像がはなはだ漠然としている。オイケンやレプケは利害諸集団の圧力から解放された権威ある強い法治国家を想定したが、筆者が目を通した限りではミュラーアルマックの著作にこれに相当するものが見当たらない。強い法治国家なのか、大衆民主主義国家なのか、それとも第三の国家なのか、不明である。

②二つの経済政策

ドイツの新自由主義者はオイケンに倣って経済をフローの領域である経済経過とこれを支える制度的枠組みである経済秩序に区別し、それぞれを対象にする経済政策を経過政策と秩序政策に分けるのが普通である。ミュラーアルマックもそのひとりであるが、彼の説の特徴は両政策を併用しようとしたところにあり、この点がオイケンの考えと異なる点である。

オイケン「経過政策ノー、秩序政策イエス」⁵⁰⁾という国家の干渉原則を定め、経済政策は所有、責任、契約、市場参入・退出、独占規制、競争促進等に関する法的枠組み—彼の言葉を借りると経済基本法(Wirtschaftsverfassung)—の制定に限定し、法に基づく政策運営を徹底して国家の裁量を抑えることによりその権力濫用を未然に防止することをめざした。このような立場から彼はポリシーミックスによって生産・消費・貯蓄・投資等の循環プロセスに干渉するケ

48) Hoppmann (1995) S.43

49) 福田(2001) pp.32-34プロレタリア化(Proletarisierung)はもともとレプケのコンセプトである。Röpke (1979a) S.29-30

50) Eucken (1968) S.336, 邦訳(1967) p.455

インズ政策を痛烈に批判した。とりわけ市場アクターの自由が国家権力によって侵害されることを危惧したからである。

ミュラーアルマックは秩序政策のほかに経過政策を採用しているが、その理由は不明である。説明がないのである。

経済政策に関するミュラーアルマックの主張は総じて漠然としすぎている嫌いがあるが、さすがに国家の干渉原則についてだけは説明がある。市場整合性(Marktkonformität)である。これは市場の機能を補強し、同時に市場アクターの自由を保証するように干渉すべきであるという原則である。もっともこれはミュラーアルマックの創案になるものではなく、もともとレプケによって考え出されたものである⁵¹⁾。ミュラーアルマックはそれをそのまま受け入れたのであるが、この原則に関する彼の説明は抽象レベルに留まり、国家干渉の行き過ぎを予防するには不十分である。

2. 社会政策

ミュラーアルマックの政策体系の中心を成すのは社会政策である。社会政策が主役であり、経済政策は脇役であっていわば社会政策の一分野であるような印象を受ける。それだけに社会政策に関する説明は経済政策に比べてはるかに具体的であり、考察項目も多岐にわたっている。以下では重要と思われる事項に限定して検討してみよう。

①社会政策の課題

社会政策は国民に対して自由かつ安全な生活を提供しうる社会秩序の構築を究極の目的としている。したがって自由の保証と安全の保証が社会政策の主要課題ということになる。政策主体はもちろん国家であるが、その像が茫漠としていることは前述の通りである。またミュラーアルマックは社会政策についても市場整合性の原則が適用されると考えている⁵²⁾。しかしこ

の原則に関する説明は抽象的かつ一般的であり、市場メカニズムを円滑に作動をさせ、同時に市場アクターの自由を保証するためには国家の社会的干渉に対してどのような制度的歯止めをかけるべきかという肝心な点は何も述べられていないのである。「社会的干渉について線引きがない」⁵³⁾とか「ミュラーアルマックは社会的安全がどのように市場経済システムに適合するかについて何も述べなかった」⁵⁴⁾と批判されるのも当然のことと言わねばならない。

②自由の保証

ミュラーアルマックは社会生活における人々の自由を保証するためには勢力中立的秩序(machtneutrale Ordnung)を構築すべきであると主張する⁵⁵⁾。勢力中立的秩序とは何か。彼の論述の中に明確な答えが用意されていないので行間を読んで解釈すると、社会諸集団(たとえば使用者層と労働者層)の勢力が平準化された社会秩序なのであろう。どのようにすればそのような秩序を構築できるか。ミュラーアルマックの答えを引用しておこう。「社会的諸勢力を枠秩序によって、特定のスタートの諸条件によって、またゲームのルールによって互いに中立化させ、安定化させ、そのようにして自由に基づく人間的秩序へ到達する」⁵⁶⁾。ここでまた行間を読んで解釈すると、引用文に言う枠秩序やゲームのルールは、諸勢力集団の平準化に資する法制度や法律なのであろう。そうだとするとこれはフライブルク学派の提案を彷彿させる。オイケンやバーム(F.Böhm)は競争秩序に資する法律として一般禁止原則に基づく独占禁止法を制定し、それによって独占企業の勢力を中立化し、市場における競争を促進することを提案

52) ミュラーアルマックは社会的市場経済における社会政策は市場整合的でなければならないと述べている。Müller-Armack (1956) S.391

53) Schlecht (1999) S.93

54) Lenel (1997) S.90

55) Müller-Armack (1966) S.227

56) Müller-Armack (1966) S.227

51) Röpke (1979a) S.78,350,393

した。そのようにすれば市場に参加する多数のアクターの自由が最大限に保証されると考えられた。ミュラーアルマックもこのようなフライブルク学派の考えを受け容れているように思われる。

上の引用文にはもうひとつスタートの条件がある。これはいわゆる機会の均等の実質化にかかわる。ミュラーアルマックはその具体策として財産形成政策や中間層政策を考えている⁵⁷⁾。財産形成政策は国家が勤労者の財産形成(たとえば宅地・住宅取得)を支援することによってスタートラインでの無産者層と有産者層との格差を是正しようとする政策である。それはすでに1940年代にレプケによって提案され⁵⁸⁾、また戦後のドイツにおいて実施されたものである。中間層政策は旧中間層である自営業および中小企業の自立を支援する政策であるが、これまた1940年代にレプケによって熱心に唱道されたものである⁵⁹⁾。

③安全の保証

安全の保証に関する社会政策は多岐に亘っているが、ここでは脱プロレタリア化政策と社会的均衡化政策の二つを取り上げておこう。

脱プロレタリア化は精神的にプロレタリア化した人々の内面の安定化を目的とする政策である。ミュラーアルマックはその具体策として共同決定、利潤参加及び田園都市建設を挙げている。労使共同決定もしくは経営参加はドイツではすでに1920年代に議論が開始され、その成果を踏まえて1951年に共同決定法が制定され、今もなお2000人以上の大企業において実施されていることは周知のところである。ミュラーアルマックは早くからこの問題に関心を寄せ、グライス(F.Greiß)と共同で“*Neues Betrieb*”という研究グループを立ち上げ、労使共同決定や経営参加の普及に努めた⁶⁰⁾。企業内部における労使共

同決定及びそれから帰結する労働者の利潤参加は労働者の疎外感や従属感を緩和すると考えられた。田園都市建設は産業分散化等によって都市住民を田園地域に移住させ、土との触れ合いを回復させることによって精神生活の安定を図ろうとするものである。このような政策にはレプケの考えが濃厚に反映されている⁶¹⁾。

ミュラーアルマックは社会的均衡化(sozialer Ausgleich)の具体策として所得格差の是正、失業対策及び生活安定化を挙げている。いずれも市場プロセスの結果として発生する諸問題の解決をめざした政策である。

所得格差の是正の具体策としては所得再分配政策が、失業対策としては景気政策が、そして生活安定化の具体策としては所得政策、物価安定政策、最低賃金政策、公共住宅建設及び社会保障政策等が論じられている⁶²⁾。

VI 結びに代えて

筆者は10年前に書いた論文においてミュラーアルマック説をオイケン説と比較しつつ仔細に検討し、「オイケン画然、ミュラーアルマック漠然」という結論を下した⁶³⁾。競争秩序は輪郭明瞭であるが、社会的市場経済の方は輪郭曖昧であるという結論であった。若き日にオイケンの経済秩序論の学習から経済体制研究に手を染めた筆者にとってミュラーアルマックの社会的市場経済はその茫漠さのゆえにどうにも捉えようのない難物であった。脱稿の時点で再検討を誓ったが、10年目にしてようやく良書との出合に恵まれ、本稿を仕上げることができた。ホッ

61) レプケは大衆化及びプロレタリア化を克服するために大都市に集中した人口を農村地帯に分散することを主張した。具体的にはスイスの小都市をモデルにして農村に人口5,6万人の田園都市を造り、そこにおいて土地付きの自己所有住宅と中小企業群を中核とした町造りを行い、大都市の人口を吸収しようとするものであった。Röpke (1979b) 284-291

62) Müller-Armack (1948) S.152

63) 福田 (1999b) pp.13-14

57) Müller-Armack (1966) S.306

58) Röpke (1979b) S.279-284

59) Röpke (1979b) S.79,171

60) Watrin (2000) p.212

ツェ説の助けを借りて筆者なりに何とか社会的市場経済の秩序像を明らかにできたのではないかと思っている。もっとも当初ミュラーアルマック説に感じた曖昧さや疑問点が今回の再検討によってすべて氷解したというわけではない。依然として得心がいかない点も多くある。そのうちのいくつかはすでに指摘したが、最後にもう二つほど補足して本稿の結びに代えることにしたい。

1. 社会的市場経済の究極の目的は人々に對して自由と安全を保証することであった。ミュラーアルマックはこの目的を達成する手段として市場経済と国家の政策を併用する道を選択した。ワトリン(Ch.Watrin)やホツツェが指摘するように⁶⁴⁾、ミュラーアルマックは自由と安全は何よりも市場経済によって実現されると考えた。市場経済は市場アクターに自由を保証し、同時にその高度の生産性によって物質的に豊かな生活を人々に提供し、もって生活の安全を実現しうる能力を有するというのがその理由であった。とは言えこのような市場経済の能力だけではまだ不十分であり、国家の政策が加わってようやく十分条件が満たされると考えられた。

そこで問題となるのは市場と政策との関係である。カッセル(D.Cassel)やレーネル(H.O.Lenel)やハーメル(H.Hamel)が指摘するように⁶⁵⁾、ミュラーアルマックは両者の間の関係を補完と捉えた。つまり市場を政策が補完するという関係である。スローガン風に言えば「可能な限りの市場、必要な限りの規制」⁶⁶⁾ということになる。このような補完性原則から国家干渉の市場整合性原則が導き出されているのだが、これについて二つの問題点を指摘しておこう。ひとつは経済政策に、もうひとつは社会政策にかかわる。

ミュラーアルマックの経済政策に内在する最大の問題点は国家の干渉に関する具体的基準がないことである。たしかに市場整合性の原則はあるが、それは一般的に過ぎて経済政策実践の基準としては用をなさないものである。しかもこの原則はレプケからの借りものであり、それを改良することすら試みられていないのである。これに対してオイケン是国家干渉を経済秩序に限定するという基本原則、競争秩序を構築するための七つの構成原則及び市場における競争を維持するための四つの規制原則を定め、国家の権力濫用や裁量的・恣意的干渉に対して制度的歯止めをかける工夫を施した。ミュラーアルマック説にはオイケン説に匹敵するような体系的な考察が欠けている。彼には経済政策論がないと批判されるのも当然と言わねばならない⁶⁷⁾。

社会政策に関するミュラーアルマック説の最大の問題点は社会政策手段の一つひとつを自由の原則(自律、自助、自己責任)に照らしつつ確定するという周到さが欠けていることである。たとえばミュラーアルマックは所得再分配政策や社会保障政策を政策リストに載せているが、これらに対応を誤ると国家扶養に道を開き、その結果として自由の原則が損なわれるリスクが高まり、行き着く先はレプケが恐れた「大衆福祉国家」(Massenwohlfahrtsstaat)の到来ということにならざるをえないであろう⁶⁸⁾。そうすると人々の国家への依存が増大し、自らに由るという意味での自由の精神は衰退を余儀なくされる。事実、ドイツを始めとする西欧諸国及び北欧諸国は第二次大戦後に自由の気風が衰えゆく大衆福祉国家の道を歩むことになったのである。

2. ミュラーアルマックの社会政策のリストには多岐に亘る多様な政策が雑然と並べられている。筆者なりに整理すると、政策リストは自

64) Watrin (2000) p.207

65) Cassel (1998) S.12, Lenel (1971) S.31, Hamel (1994) S.112

66) Soltwedel (1997) S.12

67) Watrin (2000) p.222

68) Röpke (1994) S.60

由の保証にかかわる勢力中立化政策や財産形成政策や中間層政策から、安全の保証にかかわる脱プロレタリア化政策(共同決定・利潤参加・田園都市建設等)や社会的均衡化政策(所得再分配政策・景気政策・所得政策・最低賃金政策・公共住宅建設・社会保障政策等)、果ては社会的投資政策(人的資本の育成・教育政策・医療保健政策・国土政策・交通政策・環境政策等)に及んでいる。ミュラーアルマックは1940年代後半から1970年代にかけて次々に立ち現われた政策課題をそのまま社会政策のリストに加えていったように思われてならない。無定見な現実追認と言えは言いすぎになるだろうか。いやしくも学問を標榜する限り、明確な基準を立て、論理的に齟齬のないように政策リストを作成すべきであるが、彼にはそのような努力を払った形跡がないのである。このことは取りも直さず彼にはそもそも社会政策論がないことを意味する。

ミュラーアルマックの当初の意図からすれば社会政策の課題は自由と安全をバランスさせるというところにあったはずである⁶⁹⁾。ところが結果から見ると、社会政策のリストが示すように、両者間のバランスは安全の方に偏ってしまい、いわば自由が安全に重囲される形となっている。これで人々の自由が十分に保証されるだろうか。疑問なしとしない。

ミュラーアルマックが社会的市場経済構想を打ち出したのは敗戦から間もない1946年であった。それはドイツ経済再建のために用意された処方箋であり、未来志向の政策構想であった。筆者の経済体制論をもって特徴づけると、社会的市場経済はレッセ・フェール資本主義と左右の集産主義との間をゆく第三の道であり、基本において私有、市場経済及び国家の誘導的干渉の組み合わせから成る一種の誘導資本主義であった。社会的市場経済の個性は国家の干渉制

度にある。これは先に述べたように国家が経済政策及び社会政策によって市場経済のプロセス及びそれを支える市場制度に干渉し、市場アクターやその他の生活者の経済行動を一定方向へ誘導する制度である。このような社会的市場経済は基本的にケインズが描いた混合経済体制と同類であった。

ドイツ政府が本格的に国民経済の再建に着手したのは1948年6月の通貨改革からであった。陣頭指揮を執ったのはエアハルトであったが、その彼は社会的市場経済を旗印に掲げて精力的に集産主義から競争的市場経済への体制転換を断行した。この体制転換に理論・実践両面で参画したのがほかならぬネオリベラルたちであった。ミュラーアルマックはもちろんのこと、フライブルク学派のオイケンやベーム、さらに社会学的新自由主義派のレブケらがエアハルトのもとにアドバイザーとしてまた政策補佐官として集結し、社会的市場経済という名称のもとに政府の政策実践に資する社会経済政策構想を具体的に設計した。(ドイツの学界では社会的市場経済という言葉は通常ミュラーアルマックの社会的市場経済構想と政府の実践的政策構想のいずれをもさすこと、またドイツ経済そのものを指す場合もあることに注意しなければならない)。エアハルトは経済相及び首相の任にあること18年(1949-1966年)であったが、その間に社会的市場経済の基本的仕組み(私有+市場経済+国家の誘導的干渉)が構築されたのである。エアハルト以後の歴代政権は今日に至るまで保守・革新を問わず社会的市場経済を旗印にしてドイツ経済の運営にあたってきた。その間社会的市場経済の基本構造そのものは変化しなかったが、ドイツ政府の政策路線の方は自由と安全の間で振り子運動を繰り返してきた。

ドイツでは経済危機を迎える度に決まって社会的市場経済を巡る論争が持ち上がる。たとえば東西両ドイツの統一後に経済状態が急激に悪化した1990年代には社会的市場経済の見直しの動きが生じ、「可能な限りの市場、必要な限り

69) ミュラーアルマックは社会的市場経済の課題は社会的安全の諸目的と経済的自由を均衡させることにあると述べている。Müller-Armack (1966) S.236

の国家」⁷⁰⁾ という社会的市場経済の原点に立ち返ってドイツ経済の立て直しを図るべきであるとする原点復帰派と、社会的市場経済はもはや時代の要請に対応しえなくなったので路線を転換し、「エコロジ的市場経済」⁷¹⁾ (Ökologische Marktwirtschaft) もしくは「環境—社会的市場経済」⁷²⁾ (Öko—soziale Marktwirtschaft) をめざすべきであるとする体制改革派との間で論争が展開された。それにもかかわらず、今までのところドイツ政府が社会的市場経済の旗を降ろしてしまうような気配はない。内に矛盾を含まない輪郭画然とした秩序よりも社会的市場経済のように雑多なものを含み持つ輪郭漠然とした秩序の方が却って強靱な生命力を有しているものなのかもしれない。

金融市場のグローバル化の行き過ぎによって勃発した今回の世界同時不況の中でドイツ経済は急激に悪化し、連邦政府は財政出動を軸とする緊急の不況対策を余儀なくされたが、このような容易ならざる事態は必ずや社会的市場経済の存続をめぐる論議を呼び起こすであろう。もともとグローバル化に対応したものではなかった社会的市場経済が21世紀モデルに脱皮しうるかどうかが、どうやら正念場を迎えたようである。

参考文献

- Bress,L.G. (1996) ‚Walter Eucken und die Makromorphologie – Der deutsche Weg zwischen Struktur und Evolution.in Schneider,J.,et al. (Hrsg.), *Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik in Deutschland (1933-1993)* ‚Stuttgart,S.251-282
- Cassel,D.,S.Rauhut (1998) ‚Soziale Marktwirtschaft: Eine wirtschaftspolitische Konzeption auf dem Prüfstand.in Cassel, D. (Hrsg.), *50 Jahre Soziale Marktwirtschaft*,Stuttgart,S.3-31
- Eucken,W. (1968) ‚*Grundsätze der Wirtschaftspolitik*,4. Aufl.,Tübingen,大野忠男訳『経済政策原理』,勁草書房
- 福田敏浩 (1986) 『比較経済体制論原理—形態論的ア

プローチ』,晃洋書房

- 福田敏浩 (1999a) 「社会的市場経済の原像—ドイツ経済政策の思想的源流—」,『彦根論叢』,第320号, pp.1-22
- 福田敏浩 (1999b) 「社会的市場経済の秩序像—オイケンとミュラーアルマック—」,『滋賀大学経済学部研究年報』,第6巻, pp.1-21
- 福田敏浩 (2001) 「ドイツ新自由主義の第3の道(1)—レッセ・フェールと集産主義を超えて—」,『彦根論叢』,第333号, pp.25-41
- 福田敏浩 (2002) 「ドイツ新自由主義の第3の道(2)—レッセ・フェールと集産主義を超えて—」,『彦根論叢』,第335号, pp.1-28
- Gäfin von Klinckowstroem,W. (2000) ‚Walter Eucken: Eine biographische Skizze.in Gerken,L. (Hrsg.), *Walter Eucken und sein Werk: Rückblick auf den Vordenken der sozialen Marktwirtschaft*,Tübingen,S.53-115
- Hamel,H. (1994) ‚Soziale Marktwirtschaft: Anspruch und Realität eines ordnungspolitischen Konzeption.in Klein,W.,et al. (Hrsg.), *Soziale Marktwirtschaft für Europa*,Berlin,S.109-132
- Hegmann,H. (2004) ‚Ein Plädoyer zur Wiederentdeckung des Wirtschaftsstils im neoinstitutionalistischen Politikvergleich.in *ORDO*,Bd.55,S.94-111
- Hegner,J. (2000) ‚*Alexander Rüstow—Ordnungspolitische Konzeption und Einfluß auf das wirtschaftspolitische Leitbild der Nachkriegszeit in der Bundesrepublik Deutschland*‚ Stuttgart
- Herder-Dorneich,P. (1989) ‚Ordnungstheorie-Ordnungspolitik-Ordnungsethik, in *Jahrbuch für Neue Politische Ökonomie*.Bd.8,S.3-12
- Hoppmann,E. (1995) ‚Walter Euckens Ordnungsökonomik-heute.in *ORDO*,Bd.46, S.41-55
- Hotze,A. (2008) ‚*Menschenbild und Ordnung der Sozialen Marktwirtschaft: A.Rüstow,W.Röpke,A.Müller-Armack und ihre Konzeption einer Wirtschafts-und Gesellschaftsordnung nach dem „Maße der Menschen“*‚ Hamburg
- Koslowski,P. (1991) ‚*Gesellschaftliche Koordination*‚Tübingen
- Lenel,H.O. (1971) ‚Haben Wir noch eine Soziale Marktwirtschaft ? ‚in *ORDO*,Bd.22,S.29-47
- Lenel,H.O. (1997) ‚Ordnungspolitische Kursänderungen.in *ORDO*,Bd.48,S.85-98
- Müller-Armack,Alfred (1948) ‚Die Wirtschaftsordnungen, sozial gesehen.in *ORDO*,Bd.1,S.125-154
- Müller-Armack,Alfred (1950) ‚Soziale Irenik, in *Weltwirtschaftliches Archiv*,Bd.64,S.181-203
- Müller-Armack,Alfred (1956) ‚Soziale Marktwirtschaft,in *Handwörterbuch der Sozialwissenschaften*,Göttingen,S.390-392
- Müller-Armack,Alfred (1966) ‚*Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik: Studien und Konzepte zur Sozialen Marktwirtschaft und zur Europäischen Integration*‚ Freiburg
- Müller-Armack,Alfred (1973) ‚Der humane Gehalt der

70) Müller-Armack,Andreas (1988) S.17

71) Koslowski (1991) S.5

72) Pies (1998) S.122

- Sozialen Marktwirtschaft,in Tuchtfeldt,E.(Hrsg.),
Soziale Marktwirtschaft im Wandel,Freiburg,S.15-26
- Müller-Armack,Alfred (1998),The Principles of the
Social Market Economy,in Koslowski,P. (ed.),*The
Social Market Economy*,Berlin,pp.255-274
- Müller-Armack,Andreas (1988),Das Konzept der Sozi-
alen Marktwirtschaft—Grundlagen,Entwicklung,Ak-
tualität,in Grosser,D.,et al. (Hrsg.),*Soziale Mar-
ktwirtschaft,Geschichte-Konzept-Leistung*,Stuttgart,S.1-34
- Pies,I. (1998),Theoretische Grundlagen einer
Konzeption der Sozialen Marktwirtschaft,in
Cassel,D. (Hrsg.),*50 Jahre Soziale Marktwirtschaft*,
Stuttgart,S.97-132
- Röpke,W. (1979a),*Die Gesellschaftskrisis der Gegenwart*,6.
Aufl.,Bern
- Röpke,W. (1979b),*Civitas humana,Grundfragen der
Gesellschafts-und Wirtschaftsreform*,4.Aufl.,Bern
- Röpke,W. (1994),Kernfrage der Wirtschaftsordnung,in
ORDO,Bd.45,S.27-64
- Schlecht,O. (1997),Das Bundesministerium für
Wirtschaft und die deutsche Ordnungspolitik der
Nachkriegszeit,in *ORDO*,Bd.48,S.99-117
- Schlecht,O. (1999),Müller-Armack und die soziale Marktwirt-
schaft,in Grünske,K.-D. (Hrsg.),*Kommentarband zur
Alfred Müller-Armacks Wirtschaftslenkung und Marktwirt-
schaft*,Düsseldorf,S.87-102
- Soltwedel,H. (1997),*Wettbewerb, Verantwortung und
Solidarität*,Günter-loh
- Spiethoff,A. (1932),Die allgemeine Volkswirtschaftslehre
als geschichtliche Theorie,in *Schmollers Jahrbuch für
Gesetzgebung,Verwaltung und Volkswirtschaft im
Deutschen Reiche*, II Halbband, S. 891-924
- Tuchtfeldt,E. (1969),Konvergenz der Wirtschafts-
ordnungen ? in *ORDO*, Bd.21,S.35-58
- Watrin,Ch. (2000),Alfred Müller-Armack – Economic
Policy Maker and Sociologist of Religion,in
Koslowski,P. (ed.),*The Theory of Capitalism in the
German Economic Tradition:Historism,Ordo-Libera-
lism,Critical Theory,Solidarism*,London pp.192-223
- Willgerodt,H. (2006),Der Neoliberalismus – Entste-
hung,Kampfbegriff und Meinungsstreit,in *ORDO*,
Bd.57,S.47-89